因伯だより

いんぱくだより

2016 秋冬

児童養護施設
因伯子供学園

〒682－0854
鳥取県倉吉市
みどり町3249

TEL 0858-22-2639
FAX 0858-47-0234

ホームページ
http://www.inpakukodomo.jp/

創立１１０周年を迎えて

内藤彰範 理事長

　有縁の方々のご支援を賜り、因伯子供学園は１１０周年を迎えます。

　創設者八雲龍震、数枝夫妻の「わけ隔てのない養育」を理念のもと、明治・大正・昭和の物の不足の時代に多くの職員が一丸となって、学園内の子供たちの養教育に携わってこられ、今日に引き継いでいただきました。あらためてご苦労に心から敬意を表したいと存じます。この間、多くの卒園生を送り出し各方面で活躍しております。物の豊富な今日「勿体ない、ありがたい」をこの時代の子供たちは知りません。私たち大人が教えてやらなければならない大切なことの一つではないでしょうか。

　妙寂寺境内にある学園墓には、春秋彼岸・盆には必ず職員とともに墓参りをする子供たちの姿をみると職員から心の教えが届いているなと感じます。また、夏休みのお寺のサマースクールにも参加し、他校生との交流を深めています。

　世の移り変わりが激しいこれからの時代、大切な子供たちが安心安全に暮らせる世の中にしていかなければなりません。学園職員も様々な研修会に参加し資質向上に努力しているところであります。

　今年度、行政機関のご支援をいただき「グループホーム」の建設が進んでおります。来春、完成し新たな一歩を踏み出します。

　これからも、多くの方々のご支援をいただきながら時代に即応した養教育を目指して園長並びに職員、子供たちとともに歩んでまいりたいと思いますので引き続き、ご支援よろしくお願いいたします。

齋江富子 副園長

　因伯子供学園が創立され今年で百十年になります。私がこの学園で仕事を始めたのは、今から三十八年前でした。その頃は定員が六十名で、常時五十名以上の子供たちが今と同じ園舎で生活をしていました。現在は、一部屋に二人か三人での生活ですが、その当時は、一部屋に四，五人が生活しており、随分と窮屈な思いをしていたように思います。自分だけの空間も確保されず、四六時中人の目を気にしながらの生活ではありましたが、そのことで、不満を口にするようなことはなく、よく頑張っていたと今さらながらに思います。職員の数は現在の半分くらいで次々に起こる問題の対応にバタバタと忙しくしていたことを懐かしく思いだします。

　園長室にかけてある一枚の絵は、当園の創立者である八雲数枝さんと子ども達を描いたものです。中央の机の上には、皿の上に山盛りになったコッペパンが描かれ、皆でそれを囲んでいる絵です。物資も現在のように豊かではなく、時には、少ない食料を皆で分け合つたこともあつたと聞いています。世話をする人も決して豊かではなかつたはずなのに、泣いている子を見ると思わず手を差し伸べ、少ない食料を分けずにはいられなかつた深いおもいやりの心が因伯ばかりではなく、児童養護施設の根底を支えているのだと絵をみながら思う事がよくあります。数枝さんが、お寺の境内に置き去りにされ空腹で泣いている子を目の前にして手を出さずにはおれなかつた気持ちは、皆が貧しく生活に追われていた過去の時代ばかりではなく、現在のような豊かな世の中になつても人間として誰もが持つている素直な気持ちではないでしょうか。「思わず手を出さずにいられなかつた・・・」という創立者の気持ちに思いをはせながら、日々の支援に力を注いでいきたいと思います。そして、私たちの先輩が百十年という長きにわたり社会の片隅で、創立者の思いを引き継いできてくださつたことに感謝し、これからもその灯火を絶やすことがないよう、常におもいやりの心をもって歩んでいきたいと思います。因伯子供学園が子ども達にとつて最善の場所となりますようこころからお祈りいたします。

寒さが一段と増してきていますね。今年も無事に終えられるように、気を抜かずに、天候にも体調にも気をつけていきたいですね。そして良い新年を迎えられるよう、気持ちを整理していけたらと思っております。
当学園の今年の様子をお伝えできればと「因伯だより」をお送りします。

☆今年で因伯子供学園は創立110周年を迎えます☆
それを記念して、創設者八雲数枝さんの生涯について、の記事も載せています。ぜひ読んでいただければと思います。

110周年創立記念祭

因伯子供学園では創立110周年をお祝いして、11月17日に創立記念祭を開催しました。毎年お祝いをしているのですが、今年は110周年という節目ということもあり、園長先生から、学園の歴史をより細かく子どもたちに説明されました。その話は、小さい子から大きい子まで、静かにジッとして聞いている姿にはとても感動をおぼえました。学園があったからこそ今現在に至るまで、学園を支えて来られた関係者みなさんの苦労と、創設された八雲龍震・数枝さんの想いが届いているのではないかと感じました。

新ホーム着工

新春号にも少し触れさせてもらいましたが、小規模化が推進されている今現在、当学園も新しく小規模グループホームの建設を現グランドに10月6日に起工式、着工という形で建設がスタートしております。そして来年の3月には完成し、4月には竣工式予定としております。次回の因伯だよりでは竣工式の様子などお伝えできると思います。
＊右写真は起工式の様子

鳥取県中部の震災

10月21日14時07分、震度6弱の地震が鳥取県中部を中心に発生し、大きな被害を受けました。

因伯子供学園は鉄筋コンクリート造りのため大きな被害を受ける事もなく、子どもたちと職員ともに無事に難を免れることができました。子どもたちは普段からの火災時の避難訓練の成果が出たのか、避難勧告の放送後、落ち着いて避難できていました。勝手な行動をとってしまうことなく感心させられました。その後の余震も印象強いものでした。
本当に全員が無事であったことが何よりでした。
被災された皆様の一日も早い復興をお祈りしております。
恒例の芋煮会に加えて、非常食の試食・土砂災害時の避難訓練・消火訓練、そして地震時の注意事項を学園のみんなで確認しました。＊写真上は訓練中の様子
＊写真下は芋煮会の様子です

職員紹介

因伯子供学園は１１０周年を迎えまして、改めて現職員を紹介したいと思います。各棟のリーダーからは１１０周年を迎えて感じる事・思い出・願いなど。その他の職員からは①勤続年数②学園で勤務していて嬉しかった思い出は？の２つを聞いてみました！

男子棟

○小坂宗司　１６年目

創立１００周年をみんなでお祝いしたのもつい１０年、あっという間でした。私もここに勤めるようになり１６年目が終わるところです。全国的な数ですが児童養護施設職員の平均勤続年数が７年ほどと言われている中で、まあまあ長生きしている方だと思います・・・が、我が因伯の大先輩に言わせればまだまだ未熟者であります。子どもの支援にあたる仲間も増え、細やかな視点と新たな支援方法を取り入れ実践していきますが、ますます関わりが難しくなるな。という矛盾も感じております。「子どもの生活する環境や抱えているものが変化している」そういったこともあるでしょうが、養育（子育て）することが簡単なわけがなく、奥深く、終わりがないからだろうと思っています。他施設の職員と関わりも増え、それぞれの施設のことも見えてきて思うことは、因伯のチームワーク県１位。そりゃ意見の食い違いはあるでしょう。皆が真剣勝負ですから当然です。でも園長をはじめ新人に至るまで、因伯独特の文化のなかでそれぞれの個性が活かされ、とても柔軟性があると感じています。支援に行き詰まると、困難な対応に迫られることで気が重くなりますが、「出勤すれば元気が出てくる」そんな不思議な感覚になるのは頼れるチームがあるからこそ。（これは過言ではありません）これからも因伯の一員として長く居られるとうれしいです。

尾崎↗　山根　山本　小坂　河藤　岸田

いよいよ新園舎での生活も見えてきました。質の高い家庭的な支援を目指しつつ定年まで勤め、私生活も充実させ悔いのないやりきった人生を送りたいと思います。もちろんまた１０年後も振り返り願わくば２００周年を祝う勢いでいきます。

○岸田千佳　１６年目

私が新人で入った頃、幼児さんでまだオムツをはいていた子が、今では高校生のお兄さんに。「私がオムツを交換したんだよ～」と懐かしく思った瞬間。

○山根佑介　４年目

卒園生が顔を見せに来てくれた時です。卒園生が社会に出て、それぞれ、頑張っている姿を見ると、嬉しくもあり、自分ももっと頑張ろうとパワーをもらえます。

○河藤千恵　４年目

子どもの成長が間近で見れることが嬉しいです。苦手な野菜を食べた、字が書けた、ありがとうやごめんなさいが言えた、服がたたためるようになった等……嬉しい瞬間をもっと見ていきたいです。

○山本昇太　２年目

担当の子に「迷惑かけてごめん、いつもありがとう」と書かれたメッセージカードをもらったことです。この子への悩みは尽きませんが、つらい時にこのカードを見返して励みにしています。

○尾崎明日香　５年目

２４歳の誕生日に子どもが私の好きなケーキ（半額セールの品）を買ってきてくれたこと。その気持ちが嬉しかったし、誕生日を覚えてくれていたことに一緒に過ごしてきた時間の長さを感じました。

女子棟

○松井紀美子　３６年目

「話が通じる！」学園で実習した時の感想です。幼稚園・保育園と違って、小・中・高校生との関わりはとても新鮮でした。そしてとても楽しかった。これが因伯子供学園との出会いです。それから、３５年…不登校（当時は登校拒否）の子がたくさん入所する時代がありました。学園からなら不思議と登校できる。今思うと少々乱暴ですが、親も必死でした。そして入所初日に必ずいなくなる！居心地のいい家に帰ろうと子どももまた必死です。それをみんなで探し回る。子どもを探していて、逆に深夜の検問で職質を受けるなんてことも。いろいろある中で浮かんでくるのは、大変だったことの

増田　林原　松井　岡空　小坂

方が多い。だけど今なら笑い話です。今は大変でも、今に笑って話せるようになると思えば、乗り切れる（へ気がする）。今日まで、仕事が理由で辞めようと思ったことはありません。大変なことと同じだけ、それ以上に喜びややりがいがあったからです。さらに職員のチームワークの良さがあったから。本当に感謝です。職員が生き生きと働くことは子どもの安心につながります。これさえあれば今後の因伯子供学園も安泰です。

女子棟遠足で神戸三宮にて

○林原年彦　15年目

卒園生が来園して、成長をした姿を見せてくれる喜びも勿論ですが、くだらない冗談を言っても数秒後には元通りに接してくれる学園の皆さんと一緒に仕事をさせてもらってること。

○小坂阿季　13年目

卒園生に「私が怒って窓ガラスを割った時、真っ先にけがしていない？って聞いてくれて嬉しかったよ」と言われたこと。そんなこと覚えていなかったので、余計に嬉しく思った。

○増田裕佳　5年目

担当の子どもと些細なことでぶつかり、何日か話が出来ない日が続いた時に、その子が四つ葉のクローバーを「あげる」とプレゼントしてくれたこと。

○岡空貴　2年目

12月にあったクリスマス会にて、出し物で女装をしたこと。くだらない事をする僕の姿をみて子ども達が笑ってくれる時が一番嬉しい。これからも笑顔の絶えない学園であって欲しい。

幼児棟

○河本倫子

10年をひと昔と言いますが、あっという間に100周年から10周年になったような気がします。その時幼児だった子が、中学生に成長されて、大変嬉しく思っております。その頃の幼児は人数が多く、食事をするのも、入浴するにも、段取りが悪いと時間がたくさんかかった記憶があります。

因伯子供学園の一番の楽しみは、季節の行事だと感じています。子どもも職員もたのしみにしており、その時の笑顔は100点満点だと思っています。一つの事を何十人で作るということを覚えていて欲しいと思います。大人になったら、こんな事したなぁ、ちまき、カレーライス、そーめんも流すとおいしかったなぁ、ときっと思い出すと思います。毎年感動する行事、それは卒業祝いです。卒園生一人一人のスピーチには、その子の思いがつまっており、顔つきもしっかりしており成長を感じます。学園には、多くの子どもと職員が生活していますが、人との関わりで、人の気持ちを理解したり、共感することが多いと思います。

人間は、決して一人で成長できないと思います。学園には多くの職員が子どもたちを見守り、応援している事を忘れないで欲しいと思います。学園には喜びがたくさんあると感じています。

○森下宣子　3年目

そうめん流しに参加して、みんなとおいしいそうめん・すいか・とうもろこしを食べてゲームをしてスープヌードルが当たったことです。クリスマス会も楽しみにしています。

○美船操　2年半

楽しかった思い出や，面白かった思い出は、いろいろとあります。でも、嬉しいのは、学園の皆さんが、ここを出られてから、生き生きとした姿で暮らしている様子を見た時です。

＊残りの2名は新人紹介の欄で紹介します！

森下　濱川　京力　河本　美船

記念ホーム（１００周年）

冨田　増田　野田　佐々木　山崎　宮本↖

冬の早朝の記念ホーム

○野田慎二　１４年目

１００周年の記念誌を書かせていただいてから、もう１０年が経ったことに時の速さを感じています。ただこの頃です。この１０年もの間で自分自身成長をしているかと言われればよくわかりませんが、若い時にはなかったものを持っている気がしますし、落ち着いたような気がします。精神的には少しですが、肉体的には筋肉痛が確実に遅れて来ます。こうやって変化のある中で、子どもたちへの支援の仕方も当然変わってきたな、と感じています。

変わると言えば、因伯子供学園も来年の春にはグランドに新しいホームが建ち、今までの体制は大きく変わります。状況が変われば、子どもたちも職員も色々と変化していき、大変なこともあるかと思いますが、その中でも変わらない思いをしっかりと持っていることができたらと思っています。

次の記念誌は１５０周年ですかね？またその時にお会いしましょう。

クリスマス会

入学祝い

○増田由紀江　１９年目

担当の児童が運動会で選手宣誓をする事になり、毎日毎日練習をしたけれど成功しないまま迎えた本番当日、大勢の前で見事、選手宣誓を言い終えた姿に、涙が溢れるほど嬉しかったことです。

○佐々木智美　１２年目

子ども達の成長を感じる時、そして卒園生が来園して元気に頑張っている姿を見せてくれることが嬉しいです。その度にやりがいを感じ、自分に出来ることを見つけ支援していきたいと思います。

○冨田成美　３年目

いつどこで会っても笑顔で子ども達が声を掛けてくれる事が嬉しいです。短い時間でも、最近の出来事や色々な話が聞けるのが、毎回楽しみなので、いつでも待っています！

○宮本朱実　４年目

ホームで子ども達の食事作りのお手伝いを、楽しくやって、子どもから「おいしい！」と言われると嬉しく、子どもたちの成長と食べっぷりを見て嬉しく思います。

＊一番左の山崎は新人紹介で紹介します！

炊事

松原　徳田　長田　徳井

○松原由美　１５年目

因伯子供学園の職員として１１５年目をむかえました。１１０年という長い歴史の因伯で私の１５年という年月は小さなものだと思いますが、私にとってはとても大きなものでした。

今でも職員なりたての頃の事をよく思い出します。保育の事を勉強してきてもないので、子ども達とどのように接していいのかも分からず、毎日不安でしたた。私は「とにかく、名前をおぼえよう」という気持ちでいっぱいでした。しかし、子ども達の方から「まっちゃん、おはよう！」「すごいおいしいよ！マズい！」時には「マズい！」とか、おかわり！」と言いながら、

りしている姿を見て、一緒に笑ったり、色々な話をしてきてくれて不安は徐々になくなっていきました。卒園生も含め学園のみんな本当にありがとう！

今年から毎日のメニューを考えたり、栄養面の事を考えたりする仕事もしているので、因伯に入り調理師と栄養士と二つの仕事を経験させてもらい、ありがたく思っています。

私はみんなに何をしてお返しをしてあげればいいのかな：？と考えると、おいしいご飯を作ってあげること┐あの味おいしかったな」と思い出してもらい、将来自分で作れるようになってほしいと思っています。

○徳井佳子　14年目

卒園した子が会いに来てくれると嬉しく当時の話で盛り上がります。あのご飯美味しかったとか、どうやって作る？とか聴いてくれると増々嬉しく思います。改めて、子ども達が大人になった時に学園での味を思い出して貰えるような料理を作っていきたいと思いました。

○徳田弥愛　4年目

嬉しかった事は、子ども達が「ごちそうさま」「美味しかった」と言ってくれた事です。好きな物ばかりではないだろうけど、子ども達の成長の糧となれるよう、これからも頑張りたいと思います。

○長田早百合　2年目

「今日のごはんは何？」「美味しかったよ」「ごちそうさま」と声を掛けてくれ笑顔で食べている姿を見ると幸せな気持ちになります。また食事のこと以外に今日の出来事など話してくれる時は、色々聞けて、楽しみの一つになっています。

事務

○山田峰子　6年目

普段は関わりの少ない事務職ですが、児童との何気ない会話で、素直な心に触れてホッとする瞬間があります。人との繋がりを大切に私も子ども達と共に成長したいと思います。

臨床心理士

○玉城大　3年目

日々職員さんたちが温かく接してくださることや、子ども達が時々事務室まで元気な顔をのぞかせてくれることが嬉しいです。

家庭支援専門相談員

○林かおり　10年目

たくさんの子どもたちに会い、卒園する姿を見送りましたが、卒園したあとも電話を掛けてきてくれたり、学園に遊びに来てくれ、色々悩みつつも元気な姿を見せてくれることです。

因伯ちょTOPIX

表紙にて新ホームの着工についての記事を載せていますが、12月の現段階の様子は下の写真のようになっています。上の写真は着工前の様子です。だいぶ進んできています。

学園にてザ・スーパーのんびり屋のホームズ君は今年度でおよそ7年目を迎えます。だいぶお年寄りになりました。職員の後について来るのは良いのですが、倉庫等の鍵を閉められる前に脱出出来ず。職員もその中に入ったままに気付かず、朝までそのまま過ごし、朝にどこからともない声が倉庫の中から聞こえ発見！という事件が多発しています！ホームズ君気をつけろ～！！

新人職員紹介

今年の春より新人職員３名が加わりました。紹介します！

京力　美穂　幼児棟

今年度から当園の幼児棟で勤務させていただいています。京力と申します。私は短大時代、ボランティア同好会の活動の一環で度々当園にボランティアさせていただきました。その中で、児童養護という特殊な現場で保育士として子どもの生活に携わるということにやりがいを感じ、当園への就職を決意しました。

当園に勤め始めて半年になります。ここ半年を振り返れば、子どもが見せる様々な顔に頼もしさを感じる時や、時にはこちらが子どもに圧倒され、振り回されてしまうこともあり、慌ただしくあっという間の半年間だったと感じます。そのような日々の中で、「あの時こうすれば上手くいったのではないか？」「さっきの支援は果たして間違っていないだろうか？」等自分の思い通りにならず悩んだり…と、反省と後悔を繰り返し、改めてこの仕事の難しさを痛感しております。日々成長する子ども達に負けないよう、温かく頼もしい上司や先輩方から学ばせていただき、自身の保育技術の向上や経験に活かしていきたいと思います。また、来年度には小規模ホームが設立され、それに合わせて職員に要求されることも変わるのではないかと感じています。自分の個性を活かした保育を今後の当園の発展に、より発揮できるよう、初心を忘れず、日々邁進していきたいと考えております。よろしくお願い致します。

濱川　麻有　幼児棟

今年度より、因伯子供学園で働かせていただいております。幼児担当の濱川麻有です。

小さい頃からの夢を叶えるため、２年間保育について学び、多くの実習にも行かせていただきました。他の児童養護施設の実習へ行った際、保育園とはまた違う、楽しさ・難しさの中のやりがいを感じ進路の中に児童養護施設も考え始めました。そこで高校まで過ごした明倫地区にある因伯子供学園を思い出しました。小学校の参観日などで見かけた、因伯子供学園の職員さんは面白い人だな、楽しそうだな、という印象があり、ボランティアに参加しました。子どもたちも元気よく、楽しそうにしており、因伯子供学園で働きたいと思い始めました。

4月から幼児棟で過ごしてきて、笑顔で帰れる日もあれば、あの時はもっと上手な言葉かけが出来たのではないかと悩み、後悔しながら帰る日もあります。子どもの態度や言葉に振り回されこまってしまうことが多いですが、時には子どもの可愛い笑顔や行動、笑ってしまうような言動に元気を貰つています。改めて、子どもの個性を理解し保育することの難しさを感じています。自分はきちんと保育できているのだろうかと悩むことばかりですが、先輩方から学び、自分らしい保育が出来るようになるよう日々成長していきたいと思います。

たくさんの経験を積んで、子どもたちから信頼される職員になれるよう頑張っていきたいと思います。笑顔を忘れることなく。毎日過ごしていきたいです。よろしくお願い致します。

山崎　麻衣　ホーム

皆さん、こんにちは。今年度から因伯子供学園の記念ホームで働かせていただいております、山崎麻衣と言います。よろしくお願いいたします。

私は短大の授業で学ぶまで、児童養護施設というものを知りませんでした。しかし、児童養護施設について学ぶにつれて、興味を持ち、もっと知りたいという気持ちになり、因伯子供学園の採用試験を受ける事を決めました。施設の様子を知るためには実習経験も必要だと思いましたが、それはかないませんでした。ですが採用していただき、今働けていることをとても幸せに感じています。

就職して４カ月が経ちますが、まだまだ分からないことばかりで、日々勉強だと思っています。働かせていただいている記念ホームでは職員が食事を作ります。また弁当等も必要に応じて作るのですが、毎日失敗ばかりで、料理が苦手な私はとても苦戦しました。先輩方に教えていただきながら何とか頑張れています。そして何よりも、子どもたちが何も文句を言わずに食べてくれることが嬉しく、もっと美味しく作ろうと思い、頑張れます。また子どもたちとの日々の関わりも、まずは自分が身近な大人として見本になれるように努力したいと思っています。失敗ばかりで落ち込むこともありますが、何気ない子どもとの会話だったり、楽しい雰囲気が励みになっています。今はまだ先輩方に頼ってばかりなのですが、いつかは職員として、子どもからも頼られる存在になりたいです。今後ともよろしくお願い致します。

八雲数枝さんの生涯

八雲数枝

比叡山きっての名僧と聞こえた姫宮大円と妻操との間に、数枝は明治１３年１１月１８日、新潟県中頸城郡三郷村大字松野木の勝念寺で生まれた。幼少時代は父と共に主として京都・東京に住んだが、全くお姫様暮らしで、両国の川びらきなども屋形船で見物した。しかし、いわゆる世にいうお姫様ではなく、後にあらゆる困苦窮乏に耐え抜き、強靭な貫徹精神をもって、生涯を社会事業に捧げる力を培養していたのである。

京都の女学校に在学中、卒業を待たず２年で八雲竜震と結婚したのは明治２９年１２月２８日。数枝１６歳。天台学泰斗姫宮家のお姫様と、いうなれば草深き山陰道、倉吉市新町、遊円山妙寂寺住職竜震との縁組は普通には考えられないことであった。

数枝は母に伴われて倉吉に来た。そして倉吉市河原町戸嶋益蔵の父を里親として、竜震との新しい生活に入った。その頃には思いもよらない事実がいくつもあったようであるが、その一つに褥殺ということがあった。多くは家乏しく、子どもを養うことが出来ない場合、生まれたばかりの嬰児を殺してしまうのである。ムシロやコモに包んで海や川に流したり、漬物桶で圧殺したり、土中に生き埋めにしたり、又取りあげ婆さんに頼めば、婆さんはこともなく膝の下で圧殺して始末した。「マビキ」とも言い、水に流す場合は「海老すくいに出す」とも言っていた。

河合清丸門下の奇材といわれた藤岡吉平が倉吉市西仲町にいた。彼は弘化３年丙午年生まれであった。長じて同年輩の丙午生まれの人が稀少であることに気づいてりつ然とした。丙午生まれは家に禍を招くという迷信からほとんどまぶかれたのであった。彼自身も亦生まれた時、産湯たらいに入れられて玉川に流され、下流で待ち受けた叔母に拾われ養育された。ここに彼は、自分をまぶかなかった父母の慈愛に感じ、奮然としてこの社会の悪弊に立ち向かい、県下を回って堕胎と褥殺を止めようと呼びかけていた。彼の運動はかなり効果があったとはいえ、貧困の中に生まれた子や、戦争遺児などの生い立ちは、実に暗いものであった。

一方、八雲竜震は嘗て宇都宮の監獄において１年間教悔師を勤めたことがあったが、その後明治３３年、藤岡吉平と提携して出獄者保護を目的とした給産会をつくった。そして犯罪者を通して幾多の悲惨な家庭の実情を識り、親に見捨てられた孤児や寄るべない遺児は何としても救済されねばならないと痛感した。

明治３９年１０月、意を同じくしてきた藤岡吉平が丙午の年に死んだが、八雲夫妻は決然として同年１１月１８日、数枝の誕生日に私立因伯仏教孤児院を妙寂寺内に創設した。その時すでに３名の孤児を抱え、翌４０年から大正末までは常に２０ないし３０名の院児がいた。

孤児院の企画には面倒な規準があったが夫妻は戸嶋益蔵の寄付に力を得て、院舎として木造瓦葺２階建て２９坪７合５勺、付属建物５坪２合５勺、各一棟を境内東南の一角に建てた。これは本堂健立を思い止めての一大英断であった。

ようやく財団法人因伯保児院として認められたのは創設７年目明治４５年１月２０日の事であった。しかし竜震は僧職に追われ数枝は竜震を助けて院の管理者、庶務・保育係りから飯炊き・ムツキ洗いやつくろい物までやりとげた。その上に９人の子どもが生まれたが、実子と院の子どもとの区別は絶対しないという方針のもとに、食事・服装・学用品なども同じもので通させた。

ある明け方、猫のなき声が山門の方で聞こえたので、行ってみるとそれは赤ん坊の捨て児であった。また、夜中に墓地の石塔の間に４歳男児が寝かせてあったこともある。無惨な親もあるものか、と嘆ずると同時に、困り果てた末のことであろうと思えば引き取らずにはおられなかった。天台宗開祖伝教大師（最澄）の遺言の中に「子供は可愛がって大切にしてくれ、たのむ」という意味のことがあったことを、数枝はよく人にも話し、平凡な寺の奥方としておさまってはいられなかった。

さて、捨て児の場合には戸籍の編成にも困り警察や裁判所と相談の上生年月日を推定し、命名し、自ら仮親になったりしたが、養父母となって入籍させた者もあった。

明治末期、日清日露の戦いは一応勝利をおさめ全国民万歳を叫んだ。しかしその陰には痛ましい遺族遺児たちが生活戦線にあえぎ、院児は増加していた。ところが、時には不義の間に生まれた嬰児まで持ち込む不実の親もあり、その無責任を思えば「院設立の主旨に反するので」と断りたい所だが、生まれた子供はみな仏の子供と考えて区別なしに収容した。

世の母は一人の子供の養育にすら精魂をくだき命をすりへらす。ここに数枝はその二十倍三十倍の苦悩を一身に引き受けて立つた。この美挙に賛同し、檀家の人達はじめその他各方面から物的な同情もあり、この功績は上聞にも達して大正・昭和を通じて幾度かなない内帑金も下賜された。にも拘わらず門前の雀達の中には、名利のために動いたかの如き陰口を叩く者もあつた。しかし何としても二十人三十人もの命を育てるためには人知れぬ苦しみがあり、事実は金策に悩んだ結果、数枝の生涯は質屋通いの連続であつたことに多くの人は気付かない。

もともとお寺は葬式・法事丈けのいわゆる「葬式坊主」ではいけない、社会的な働きこそ使命であると考えていた八雲夫妻には、山間僻地の文化啓蒙にも乗り出し、成長した院児達によつて楽隊を組織した。小ラッパ・大太鼓・小太鼓・シンバルなどの数人編成。この楽隊は岡山県との県境の辺りの山村まで巡回した。そして幻灯を映し、幻灯は動く幻灯、活動写真とかわり、その映像を通して人権の尊厳、人間の親愛などを強調した。村を回る楽隊、活動写真、大きい朝顔ラッパの蓄音機などは山村の漁村の人たちにとつて初めての驚きであり、大きな感銘をあたえた。一行の中に病人でもでると医師につけたばかりでなく、数枝は我を忘れてその看護に当たつた。またラッパの練習に口を荒らす子どものためには鶏卵を持たせるなど細かな配慮も怠らなかつた。

孤児院寺院会計は別途であり、会計は終始数枝が克明に記帳し、そのやりくり算段のために眠れない夜もあつた。こんな時には実父大円の教訓、「困つた時は仏を拝め、仏様に仕えご奉仕するのがお前の仕事だぞよ」を思いおこし、入嫁の折に持参したお内仏に向かつて念誦した。

院児は皆良い子ばかりではなかつた。中には盗癖の強い子、極度に知能の遅れた子、未熟児・虚弱児、一度引き取られてまた来る児などいろいろな子供の全部を熟知して蔭となり日向となり仏心になつて世話をした。例えば冬の夜の炬燵火事から焼け布団、火傷の後始末や夜半におやつをねだる児の分配から食物の好き嫌い、頑是ない稚児の我がままに耐えて、千手観音か六臂弁財天のような働きに睡眠も充分にとれなかつた。

子供達は成長すると夫々社会の荒波の中に飛び立つていつた。しかし同じ人間でありながら、孤児院出身であることに社会の風当たりは強く、そうした事から彼らも劣等感をもつてか遠くへ走り再びは顔を見せない者もあつた。しかし他に幼童の日を過ごした故郷を、又恩愛の母をもたない人達は折にふれ便りしたり、妙寂寺とこの母を訪ねた。中には尾羽打ちからしその上病気になつて帰つて来て、再び数枝の温かいみとりの末浄土へ引きとられた人もあつた。

今でこそ人権宣言・児童憲章・社会福祉法などと叫ばれているが、明治中期既に八雲夫妻は身を以つてこの事に当たり、不幸を背負つて生まれた子供たちのために生涯を捧げたのである。

1936年（昭和11年）、創設以来105名の院児を育てた頃、三井報恩会・慶福会等より寄付があり、倉吉市住吉町へ院舎を新築して移転（30周年記念事業）。社会福祉法人因伯子供学園と改称されたのは1952年（昭和27年）のこと。

数枝は雨の日も欠かすことなく、寺から2キロメートルの道を往復して母親代わりをつとめた。その後自分の食事は寺から運ばせて、学園に寝泊まりし、八十歳を超えてからも赤ん坊には添い寝して肌で育てるという慈悲の終生を貫いた。人を心から歓待し、物事凡て善意に解し説明し、常に誠実を旨として「ありがたい、勿体ない」とよく言われていた。したがって周囲から信望も厚く仏教婦人会の要職にて活躍、又夫竜震亡き後は方面委員・民生委員に任ぜられ、克くその任を全うした。

昭和42年春の彼岸の日、数枝は転んで足をくじいた。そして約一年半病床に就く身となつた。かくて昭和43年9月27日午後11時、52名の園児を遺し妙寂寺に於いて弥陀の安楽浄土へ招かれて逝かれた。「正しい往生をしたい」という一語がこの世に残された最後の言葉であつた。

＊参考文献
鳥取県百傑伝
近代百年
「山陰評論社」刊

【沿革】
○1906年（明治39年）妙寂寺住職八雲龍震・数枝夫妻が倉吉市新町の境内に孤児院開設
○1912年（大正1年）法人化「財団法人因伯保児院」認可
○1936年（昭和11年）倉吉市住吉町に新築移転（創立30周年記念事業）
○1950年（昭和25年）名称変更「財団法人因伯子供学園」となる
○1952年（昭和27年）組織変更「社会福祉法人因伯子供学園」と改称
○1976年（昭和51年）現在のみどり町への移転（70周年記念事業）
○2005年（平成17年）グループホーム「記念ホーム」開設（100周年記念事業）

因伯子供学園へのご寄付に感謝申し上げます。

2016年1月から2016年12月まで、ご寄付いただいた方々は下記のとおりです。心より感謝し、ご報告申し上げます。　敬省略

寄付者	物品寄付者		
相見槻子	石川明美	斎藤正七郎	鈴本光平
生田百合子	相見槻子	西口博	福井聰志
河本充弘	安納スウィーツファーム	山陰中央新報社鳥取総局	楽天株式会社
杉山裕之	鳥取中央農業協同組合	ガイア	富士警備保障
今井隼人	明治安田生命	日本鏡餅組合	エスプリ・ドゥ・フルール
赤田正行	成徳地区更生保護女性会	アイスクリーム協会	ケーキショップ　チロル
南脇政文	満正寺	全国シャンメリー協同組合	杉山裕之
大河内美和	家畜病院モウモウETセンター	住まいのボランティア	小鴨地区民生児童委員
山下誠	灘手ゴルフセンター	ヤッホーキッズ	因伯子供学園OB
倉吉地区更生保護女性会	思いやり活動まるごみ薩摩本部実行委員会	倉吉キリンの会	妙寂寺
鳥短オレンジリボン同好会		山陰リンクの会	大丸輝和
公益資本主義推進協議会	吉祥院	カトリック倉吉教会	今井隼人
国際ソロプチミスト倉吉	アパマンショップネットワーク		
鳥取中央農業協同組合			
鳥取県労働者福祉協議会			
内藤彰範			

編集後記：今年の特記事項はやはり地震があげられます。地震の起きた日は当直勤務でして本震後に学園に到着しました。在園していた園児・職員は駐車場に避難しましたので、テレビが見れる状況ではなく、地震情報もスマホ以外では得ることが出来ませんでした。熊本地震の時のように前震なのか？本震なのか？の可能性もあったため余震には神経が尖りました。夜になりますと取り敢えず急な避難も可能にするためニ階は使わず、一階のみでの生活に戻りましたが、夜中であるにもかかわらず、緊急避難の為に玄関辺りの扉は全開、照明もつけたままの状態でした。今までに感じたことのない空気がありました。子ども達は思ったより早めの就寝で安心しましたが、自分は、当直勤務という事もあり添い寝をしながら、全く眠れず、起きてしまう子と話をしながら続く余震とともに朝方を迎えたのを、何事もなく覚えています。その後、余震は続いたものの、実は地震のあった日の深夜の事、玄関に大阪に住んでいるはずの卒園生の姿があること2回。「倉吉で震度6」というニュースを見て、大阪から飛んで帰って来て真っ先に因伯に寄った、と話す。最初に来た2人はバイクで、その後に来た2人は車で真夜中の高速道路を4時間飛ばして来たとのこと。そして、持って来ている段ボールの中にはたくさんお菓子が詰まっていました。来てくれた卒園生たちは、当時やんちゃな園児でしたが、学園を気に掛けてくれていた今回の来園はとても心温まり、学園は心の故郷で存在していたんだなと嬉しく思いました。長くなりましたが、地震の日の様子と地震卒園生の夜のスペシャルなエピソードでした。

成長している姿を見ると安堵感と学園の生命力を強く感じます。110年という長いバックグラウンドがあるからこそ学園の大きな安定感に繋がっているのだと思います。この歴史の重みをきちんと自覚し、職員一同が責任ある職務を全うしていく必要があると強く感じております。今後とも因伯子供学園をよろしくお願いいたします。

編集委員　林原年彦